# 特集　住宅都市の創造

## ー 阪神間を事例として ー

地域、とりわけ神戸や阪神間について語るとき、私の胸中にはいつも、あの阪神・淡路大震災で経験した痛みが深く根を下ろしていることを感じる。1995年1月17日未明、この地を襲った直下型大地震は一瞬にしてすべての都市機能を破壊し、6千余名の尊い人命を奪った。ほの暗い空一面に黒煙が立ち上った、あの朝の神戸の姿を、今も私は忘れることができない。この痛みは、おそらく完全に消えることはないであろうし、消し去るべきではない。

本特集号の共通テーマである「阪神間」は、大震災で甚大な被害を受けた地域である。震災後14年が経過した今も、かつての被災地には、多くの課題が残されている。被災した私たちは、何らかの傷を心に残したまま、速すぎる時の流れに抗うことなく生活を続けてきた。傷を抱えながらも、食べ、語らい、働き、暮らすことを、止めるわけにはいかなかった。なぜならば、それが、「生きる」ということだからだ。

人が「生きる」という意味を考えたとき、さまざまな思いを重ねながら人々が生きる場所、それが、「地域」であるといえる。地域の最小単位を、「同じ景色を共有する空間」と定義するならば、地域を語ることは、その「同じ景色を共有する」人々の暮らしを語ることである。日々の同じ景色のなか、ありふれた日常の営みのなかで触れる空気、車窓から眺める景色、風の匂い、陽ざし—人々が日々、無意識に受け入れている、それら自然の恵みや、地域が育んできた歴史のなかに、地域文化を支える礎がある。そこに、住む人々、訪れる人々の思いや行動が加わり、地域文化が醸成されていく。それらは行政の役割とはちがったところで、人々の生活文化を支えていく。

阪神間という地域はかつて、関西の企業家や文化人たちの別荘地として開発され、その後、住宅地として開発されてきた地域である。同時に、芸術・文学・食・ファッションなどの面で、人々の生活文化の質的向上に影響を与

え、独自のライフスタイルを確立してきた地域でもある。なかでも芦屋・岡本・御影あたりは、周辺に美術館や博物館などが多く点在し、近隣地域に大学も多いところから、文化創造の担い手としての役割を果たし、地域イメージの向上に寄与してきた。人が「住まう」地域には、利便性だけではなく、豊かに生きるための礎が必要である。地域の豊かな文化がその土地の魅力となり、地域に生きる人々の心をしっかりと支えていく。

多くの尊い生命を奪った大震災の重く辛い体験は、地域を活かし、地域に生きることの意味を、私たちがあらためて問い直す契機にもなった。地域のもつ意味を問い続けることは、あの激震を体験した私たちに残された、共通の課題であるといえるかもしれない。

本年3月、奈良―神戸間を結ぶ、「阪神なんば線」が開通した。阪神電鉄が60年前から着想し、その長年の悲願がかなったという。神戸―大阪―奈良が結ばれ、古都・奈良が、海の見える街・神戸に出会う。観光交流人口が増えれば、これらの地域も互いに刺激を受け、活性化の一助となるだろう。万葉の文化を礎に長い歴史を刻んできた奈良と、居留地を窓口に西洋文化を受容し、海港都市として発展してきた神戸が結ばれる。異なる地域との出会いは、異文化との出会いでもある。知らないまちを訪れ、その土地が育んできた地域の文化にふれ、優しさや温かさにふれて、人はまた、元気に「生きる」ことができる。人の元気が、地域の元気につながる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

本特集号は、阪神間に焦点をしぼり、「住宅都市の創造」を共通テーマに掲げた。ここでは、「住宅都市の創造」という概念を、鉄道・道路・住宅開発などハード面における基盤整備のみならず、ソフト面における都市の創造、すなわち、芸術・文学・食・ファッションなどを通じて醸成される生活文化やライフスタイル、人々の暮らしを支える地域経済の発展をも包含したものとしてとらえている。明治期以来、住宅都市地域として独自の生活文化圏を形成し、地域文化を創出してきた阪神間における都市発展のあり方を、歴史

的考察を通じて解明することが、本特集のねらいである。執筆にあたっては、現在、歴史・文化・経済の各部門で協力し、芦屋市史編纂作業を進めている、神木哲男（神戸大学ならびに奈良県立大学名誉教授・奈良県立大学前学長）、加藤慶一郎（流通科学大学商学部教授）、戸田清子（本学准教授）の三名が担当した。冒頭の神木論文では、「阪神間住宅都市の形成と展開」をテーマに、明治末期から大正、昭和期に至り、1970年代までを取り扱っている。続く加藤論文では、それを受けて、1970年代以降の地域経済の発展について、芦屋市の商業を中心に論じている。さらに、最後の戸田論文では、それらの住宅地開発や地域経済の発展を促してきた阪神間の文化創造空間としての側面を取り上げ、阪神間モダニズムというパラダイムを通じて考察している。

各論文の概要は、次の通りである。まず、神木論文は、芦屋市を事例に、住宅都市の形成と展開について検討を加えている。芦屋市では、明治末期、阪神電鉄線の敷設により、沿岸部の宅地化が始まった。大正期には、東海道本線に芦屋駅が開設され、中間地域の開発が進む。その後、山麓部に阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）神戸線が開通し、山地の宅地化が進展する。昭和初期には、高級住宅地・六麓荘の住宅開発によって邸宅群が形成され、戦前期における高級住宅都市・芦屋のイメージが、ここに定着する。同論文は、以上の点をふまえたうえで、昭和15（1940）年の市政発足当時ならびに昭和40（1965）年における市内町別人口密度について詳細な分析を行い、市内を横断する各鉄道線（阪急、阪神、旧国鉄）によって住宅分布が明確に色分けされていることを指摘している。明治期後半から昭和初期にかけて進められた阪神間における住宅地開発について歴史的考察が加えられ、芦屋市が「阪神間住宅都市」として定着するに至った経緯が明らかにされているが、その開発プロセスが、時代別に第1期から第3期までに区切られ、芦屋市における住宅地開発の意義と特徴について言及されている点が注目される。

加藤論文では、「芦屋市の商業—1970～90年代の小売業を中心に—」をテーマに、芦屋市の商業を、小売業の側面から分析している。芦屋市の小売業は、1970年代以降の大型店の出店と、それとほぼ同時期に行われたJR芦屋駅前

再開発によって大きく変貌を遂げたと考えられる。本論文では、その実態と政策的対応について瞥見し、高度経済成長期以降の地域の産業と消費生活のあり方について検討を加えている。大型小売店の出店や駅前再開発についての問題は、中心市街地活性化政策とも関連し、奈良市を含めた各地域における今後の商業開発のあり方にも、示唆を与え得るものと考える。

最後の戸田論文では、「阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造」をテーマに、近代以降、独自の地域文化を築き、人々のライフスタイルを支えてきた阪神間に焦点をあて、その地域文化の創造過程について検討を加えている。同時に、阪神間という地域性と、「モダニズム」という言葉で表現される時代性との関連についても考察を試み、地域文化のひとつの表象としての阪神間モダニズムについて解明することをねらいとしている。本論文では、阪急・阪神の両電鉄会社による沿線住宅地開発について検討するとともに、沿線における数々のアミューズメント施設やイベントを、住宅地開発を補強する集客装置であると位置づけ、その意義についても明らかにしている。

阪神間は、明治末期から大正期、昭和期を通じて、電鉄会社による住宅地開発が行われ、地元有力者の手による私立学校の創設や病院の建設など、生活文化圏としての基盤整備を通じて、魅力ある住宅都市空間として成立してきた。同時に、沿線には、暮らしに「夢」を与えるような施設群—宝塚歌劇場や甲子園球場、遊園地や美術館が配置され、独自の地域文化を創出する文化創造空間としても発展をみてきた。居住空間、商業空間、観光・アミューズメント空間、さらには、芸術やファッションの発信基地など、いくつかの文脈が重層的に交差し、阪神間は、特色ある住宅都市空間を形成している。本特集号における三論文は、歴史・経済・文化の各分野から、このような住宅都市空間としての阪神間にアプローチし、その成立と発展について考察を行うとともに、阪神間を構成する、さまざまな表象に検討を加え、住宅都市空間としての意義と特質について読み解こうとするものである。

本特集号を通じて、阪神間という地域に関心を深めて頂くことを願うとともに、この特集が、開通まもない「阪神なんば線」と同様、奈良と阪神間という二つの地域を結び、ともに地域創造をめざしていくための小さな契機に

なれば、これ以上の喜びはない。

なお、神木哲男、加藤慶一郎の両氏には、ご多忙中にもかかわらず、ご執筆を快くお引き受け頂いた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

（特集担当者・戸田清子）